現代日本紀行文学全集

補巻 3

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集　補巻3

監修　志賀直哉
　　佐藤春夫
　　川端康成
　　小林秀雄
　　井上靖

発行日　昭和五一年八月一日　発行

発行所　東京都新宿区新宿二―一九―一三
電話　東京〇三―三五四―七〇三一（代）
株式会社　ほるぷ出版
代表　山浦喜三夫

総発売元　東京都新宿区新宿二―一九―一三
電話　東京〇三―三五六―六二一一（代）
株式会社　ほるぷ
代表　中森蒔人

制作　東京連合印刷株式会社

NDC 915.8　194 mm×138 mm　p. 374　52.1

目

次

〔三重〕
神様のお叱言　なだいなだ　3
名張は秋の漂う町　戸塚文子　14
〔京都〕
修学院幻想　大仏次郎　17
洛西洛南　丹羽文雄　27
丹波の乳垂れ銀杏　水上勉　32
〔奈良〕
仏界魔界　石川淳　39
秘史を求めて奥吉野へ　飯沢匡　43
〔和歌山〕
紀州田辺風物詩　杉村武　50
〔大阪〕
大阪の道すじ　小野十三郎　58

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大阪の散歩道　藤沢桓夫　69
〔兵庫〕
故郷であって故郷でなく　中村真一郎　75
〔鳥取〕
香住から白兎海岸へ　阿部昭　82
〔島根〕
隠岐の島の旅情　佐多稲子　91
雪舟の庭　庄野潤三　95
〔岡山〕
山陽街道　木山捷平　99
〔広島〕
消えたオチョロ船　井伏鱒二　105
下関・広島をひた走り　きだみのる

〔山口〕
萩へ　瀬戸内晴美　124
〔香川〕
東瀬戸の岬――仔犬の足――　壺井栄　132
高松・屋島・坂出　宮本常一　135
〔徳島〕
島まわりの人形座　沢野久雄　143
祖谷渓の源平譚　岡田喜秋　150
〔高知〕
嵐の岬　竹西寛子　162
竜馬と酒と黒潮と　司馬遼太郎　167
〔愛媛〕
海賊の故郷・日振島　田宮虎彦　180
カカシの誕生と進化　加藤秀俊　190

〔福岡〕
遠賀川　上野英信　197
〔佐賀〕
赤絵の町有田と切支丹の島平戸　角田房子　213
〔長崎〕
長崎で見つけた十字架の鍔　佐多稲子　222
西海の落日　木山捷平　225
〔熊本〕
長崎天草を訪ねて　辻邦生　237
〔大分〕
野仏群像　沢野久雄　249
別府　門田勲　257
〔宮崎〕
風景という名の商品　なだいなだ　260

〔鹿児島〕
坊の津＝桜島幻想　中村真一郎　271
鬼か木霊か　山口瞳　278
〔沖縄〕
奄美―日本の南島　島尾敏雄　292
沖縄の紅型　芝木好子　299
沖縄ふたたび　古山高麗雄　307
沖縄の一週間　井上靖　318
*
志賀直哉紀行　藤枝静男　322
にせ車掌の記　阿川弘之　340
初航海のころ　小柴秋夫　346

補

巻

3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神様のお叱言

なだ　いなだ

1

また、いや、そうではない、また、また、である。出かけようとすると雨だった。これで三回目、箱根、那須、そして今度は伊勢・志摩まで足をのばすことになったのだが、二度続けて雨に降られると、この私ですら、ジンクスなどというものを考えてみたくなる。人情というべきであろう。それで、少し遠くに行くことにした。遠くに行けば晴れるかも知れぬというわけだ。また自動車だけにするのがいけないのかも知れぬというので、新幹線を利用することにした。傘を持っていると、天気の神様が知っていて同情してくれぬといけないので、コウモリの骨を一本折った。もちろん、これは故意ではなかったが、天の神様ならぬ山の神様は、

「あんたは、なんて困った人なんでしょ。今年は二本置き忘れて来て、これが三本目の傘なのよ。たった二回しかまだ使ってないのに」

と私に叱言を言った。

それにもかかわらずである。今回も雨が降った。どういうことになっているのであろうか。朝、起きてみると水たまりの上には、絶え間なく、無数の水の輪がえがかれ続けていた。

こうなると、ジンクスなどとくよくよするべきではない。読者よ、これが、貴方がたの場合であっても、もうくよくよなどしていてはならない。ジンクスなんて、気の弱い人間が考えることだ。こうなったら、天気の神様とこんくらべの競争をするつもりにならなければならぬ。三回雨を降らしたのだから、天気の神様よ、四回目も降らしてみせろ。降らせられるものなら、ほめてやろう。五回目も六回目も絶対に降らせられるものなら、降らせてごらんなさい。十二回、全部降らせられたら、天晴れと言うべきですぞ。そう考えれば、旅の度に、雨がまた降らんだろうか、と楽しみに待つことが出来るだろう。

人生というものは、考え方によって、楽観することも、

悲観することも出来るのだ。この世から、確かに不運というものが消え去ることはないだろう。不運がなければ運がない。だが、不運を苦にせぬ生き方はあるし、それが人間の智慧というものではあるまいか。身体障害者の合言葉に、「失ったものを数えるな、残ったものを数えよう」というのがある。片手のない人は、失われた片手を悲しんでいたら、人生を暗いものとしか考えることが出来ぬ。だが、自分には幸運にも、もう一つの手が残されていて、よかったと考えれば、運命に感謝する気も起きるというわけだ。

長い前置きになったが、読者よ、旅立ちに雨に降られると、こんなにも考え、こんなにも利口になったりするものなのである。たかが、旅に雨に降られたぐらいで、くよくよするな。

伊勢まで、新幹線と近鉄特急を使うと、連絡がよければ四時間足らずで行ってしまう。うまくプランさえ作れば、一泊二日で充分に、東京から行って来られる。新幹線が出来たことは、今までの旅の計画をすっかり変えてしまった。私が昔読んだ「東京から一泊の旅」という本は、すっかり書き換えられねばならないだろう。これに、飛行機が加われば、日本のほとんど全部が一泊二日で旅することが出来ることになる。

雨は降っていたが、子供たちは、朝から大ハシャギであった。

「夢の超特急に乗るんだぞう」

子供たちは、新幹線に乗るのがはじめてだ。子供というものは、乗り物が好きである。乗り物に乗るのが旅の目的であって、乗り物が旅の手段ではないのである。だから「ひかり号」で二時間で名古屋に着き、乗り換えのために降りなければならなくなると、不満であって、

「パパあ、もう少し乗っていようよ」

と三人の娘どもたちは言うのであった。

新幹線の「ひかり号」が、世界一速い列車であることは、子供たちも知っている。ママも知っている。残念なことは、新幹線が出来るまで、世界一速い汽車はフランスのパリ・リョン間を走る特急ミストラル号なのであった。フランス人のママとしては、ミストラル号が、ひかり号に世界一の座を奪われたことは、残念であるに違いない。だが、このミストラル号に乗ったことのある人間は、わが家ではこの私、パパしかおらないのであった。

世界一ということは、一国の人間を夢中にするものらしい。われわれでも「ひかり号」が世界一の座をおろされたら、何となく悲しい感じがするだろう。そこで私は

家内を慰めてやった。「ひかり号」は電車列車として世界一になったが、ミストラル号は電気機関車のひっぱる列車としては、それでも未だ世界一なのであると。

日仏のあいのこである私の娘たちは、どう転んでも、パパの国の方が世界一であるか、ママの国の方が世界一であるかなので、大したこだわりは見せなかった。ただ、フランスは日本に奪われた世界一の座を奪いかえすために、新しい鉄道を研究中であることを紹介しておこう。これはエヤクッションカーの鉄道で、コンクリートのレールはあるが、車では走らない列車であるそうだ。飛行機と鉄道のあいのこみたいなものらしい。どうもアイデアの世界では、純系よりあいのこの方が、すぐれたものがあるらしい。混血娘の父親としては、人間もそうであって欲しいなどと思ったりするのである。脱線した。

話は少々脱線したが新幹線の方は、きっかりと二時間で脱線もなく名古屋についた。全く楽である。私が家内と結婚して最初に旅行したのが、静岡までであった。美保の松原から富士を眺めたのだった。その時帰りの電車が五時間以上かかった。家内もその時のことをおぼえていて、便利になったものね、とつぶやいた。

列車の中で、時々、電話の呼び出しがある。

「東京深川のキョクテン・カチカチ様、東京からお電話です」と名古屋の近くで車内放送が呼んだ。長女は耳ざとくそれを聞いて、

「変な名前ねえ」と言ったが、これも、予期しない旅の楽しみというものだ。この人は日本人であろうか、それともインドネシヤの人あたりであろうか。日本人だとしたら、世の中は広くて、不思議な名前の人があるものだ、などと考える。そもそも、旅は知らず知らずのうちに見聞をひろめる。

名古屋で近鉄の特急に乗り換えるのだが、指定席をとってあるので、その電車までに三時間半の時間がある。そこで、名古屋城を見物することにした。

「お城に行くの、わあ嬉しいな。お姫様が出て来るの、パパ」

子供たちは、お城というと、すぐそう私に答えたが、子供の世界ではお城というものは、お話の国に属しているらしい。しかし名古屋城には、残念ながら、お話の世界はかけらほどもなかった。それが子供たちにはちょっと不満であった。

しかし、大人の方にも不満がないわけではない。日本には、外国とくらべると、昔からの建築物で残されているものが、少ない。奈良や京都を例外にすると、観光は

景色を売り物にしているものが大部分である。木造建築と、繰返された戦争のことを考えると、無理もないことだと思うが、歴史的な建築物の再建に当っては、もっと神経を使ってもよいと思う。名古屋城で、昔のままなのは、石垣だけと言った方がよい。天守閣は、外形だけは昔のものを形どって再建された。だが、外形以外には、何も残されているものがない。中に入れば単なるコンクリートのビルだ。これでは、熱海城と余り変わりがないように、私には思えるのだ。天守閣の上は展望台で、エレベーターで行かれる。しかし、これは意味のないことだと思う。

「このお城で美しいのは石垣ね」

と家内が言った。それは、もっともなことであると思った。

2

近鉄特急で、二時間たらず、宇治山田に着いた。刈田の中に、干大根が午後の光に映えていた。その景色が家内の注意をひいたようだった。このあたりの民家や町並には、戦前の面影が残されている。

「ここらの民家は、おもむきがあっていいわ、私、好きだわ」

家内がニクいことを言う。確かにそうだ。日本の古い民家には、戦後再建された大都会の民家や、商店街などに見られない美しさがある。屋根の美しさだ。大都会の周囲は今や原色の安っぽいトタン屋根に埋められてしまった。そして、灰色の瓦屋根の美しさなどは、忘れさられてしまっている。こうしたものを見ると、失ったものは数えるな、などと言いながら、日本の失ったものは数えてみたくなってしまう。

宇治山田の駅をおりて、タクシーを拾った。外宮、内宮をまわって、鳥羽まで。外宮も内宮も、森と庭が美しい。そして深い。しかし、神宮そのものは、矢張り純粋の観光の対象ではないようだ。外宮も内宮も、写真がどうしても撮れないように、塀で奥深くかくされているし、中の写真を撮ろうとしたら、守衛さんに叱られた。子供たちは、自分たちがいつも叱られるパパが、よその人に叱られたものだから、目をまるくして驚いていた。

良い悪いを問題にするのではないが、こんなところに、日本と西洋との、宗教感情の違いがあるようだ。私はヨーロッパをあちらこちら旅行したが、古い教会や寺院というものは、土地の人間にとっては宗教的感情の対象かも知れぬが、旅行者にとっては観光的な対象でしかなかった。教会の外側にも内側にもカメラを向けたし、ミサ

にもカメラを向けた。しかし、土地の人間は、うるさく、わずらわしいであろう旅行者には、無関心で、まるで存在しないかのように振舞っていた。また、旅行者も足音を低めたり、自然につつしんだ態度でそれらのものを見つめた。カメラを向けることが、不謹慎であると咎められることはなかった。

しかし、考えてみると、昔、森有礼(ありのり)は内宮のみすをステッキで持ち上げて問題を起こし、後に刺客に命を奪われることになった。おそらく、日本の神道家たちにはがまんのならない行為であったのだろう。森有礼は、確かに、そのような感情を無視したのであった。その感情を、私もわからぬではない。だが、今や、神社仏閣は、逆に観光のおかげで生きのびている世の中なのだ。観光の対象となるためには、カメラくらいは許すべきではなかろうか。実際には職業写真家の写真が、絵葉書や旅行案内書にはのっているのだから。そして、プロの写真家がカメラを向けるのが不謹慎でなくて、アマの写真家は不謹慎だというのは、ちょっと、行きすぎのような気がする。

売りものの絵はがきのためならよくて、観光客のカメラを禁ずる。これでは、絵はがきを売らんがためみたいだ。ことに、外国からの旅行者は、説明を前もってしなければ、必ず、気軽にカメラを向けて、無用の感情的なトラブルを起こすおそれがあるだろう。

ともかく、内宮にしても外宮にしても、この日本最古の建築様式による、神社建築の傑作に興味を持たぬ旅行者はおるまい。単純で素朴な、簡潔そのものの美しさがそこに見られるし、矢張り、出来ればくわしく、もっと細部にわたって見たいという気持が、宗教感情を離れて自然にうかんで来る。それをただ神秘的なヴェールでとざしておこうというのは、時代錯誤だ。

内宮の境内は美しかった。杉の大木は家内には、珍しいらしい。子供たちも目をまるくして、びっくりした様子だ。何年ぐらいたっているのだろうというので、いいかげんに千年ぐらいと答えたら、すぐに嘘らしいことがばれてしまった。実際には、二、三百年くらいのものだろう。根もとから二つに分れた大木があった。

「これは一本の木が二つにわかれたもの、それとも二本の木がくっついて一本になったもの」

子供は時々、めんどくさいことを聞く。返答に困ったので、木に聞けとごまかした。われながら、無責任なパパである。

杉の大木については、ベルツの日記の中の一節に書いてあったことを思いだす。明治二十年頃であろうか。彼

が草津まで行った時のことである。彼は、草津の温泉を医学的治療に利用するための指導をしていたのであった。吾妻渓谷沿いの道を行くと、珍しい杉の木があった。一本の老木が枯れて、巨大な、洞を作っており、その洞の中に新しい杉の大木が生えていた。まるで、死んだ老木の皮をすっかり着るかのようにである。ベルツは、この自然の不思議ないたずらを見て感心した。そしてこの二重の杉の大木は当時、土地の有名な見物であったし、今であったら天然記念物に指定されていただろう。だが、ベルツのおどろいたのは、その杉の木に、無造作にブリキ製の茶屋の看板か何かが釘で打ちつけられていたことだった。ベルツは天然の奇現象を、どうして日本人はもっと大切にしないのだろうか、と考えている。

日本の杉の大木のつくりだす風景は、外人には非常に印象的なものであるらしい。前に引用した箱根の芦ノ湖で日本ではじめて泳いだと自称する英国の外交官、アーネスト・サトウは箱根の杉並木の美しさを語っているし、ベルツは、日光の杉並木を、世界の並木道の中で最も美しいものと書いているほどだ。そして、外人に日本的な宗教建築の根本にある美学意識を示すのに、伊勢神宮ほどよい例はない。神社は建物だけが独立しているのでなく、周囲の自然との調和によって宗教的感情をかきたたせるのだ。西欧の寺院には、人間の築き上げた記念碑的な要素が強い。石の美学と言えるものだろうし、砂漠的な民族の美学とも言えるだろう。だが、最も日本的な伝統を残しているこの伊勢神宮は、杉の古木に囲まれた自然の中に置かれなかったら、無意味なものになる。内宮の建物が田んぼの真中にあったらあまり意味はない。鎮守は、鎮守の森と一体なものとして日本人の心の中に存在して来たのだ。こうした、民族的な美意識は、矢張り風土の影響というものなのだろう。

私と家内は、二人でそんな話をしていた。内宮・外宮の写真がとれなかったので、私がちょっと不満をもらすと、家内が、

「なにしろ、天の岩戸にかくれた神様の神殿なのだから、それでちっとも不思議はないわ」と私に言った。いつの間にやら、変なことを覚えている。

鳥羽の国際ホテルで一晩をすごす。市街から少し離れた小さな岬の一角にあって、窓から波静かな、すきとおるように綺麗な水の鳥羽湾を見おろすことが出来る。季節が夏でないのが残念であった。すき通った水は泳ぎたい感情をかきたてたからだ。私たちの泊まったのは日本間であったが、家内は日本間が好きである。自分の家で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com